AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2020.3) 令和元年度:85.

急変対応能力の向上を目指すシミュレーショントレーニングの取り組み

佐藤 希, 高橋 さやか, 氏家 陽子, 末武 美穂, 渡邊 充広, 田中 理佳

急変対応能力の向上を目指すシミュレーショントレーニングの取り組み

旭川医科大学病院　救命救急ナースステーション　○佐藤希
6階東ナースステーション　高橋さやか　氏家陽子　末武美穂　渡邊充広　田中理佳
キーワード：急変時対応、フィジカルアセスメント能力、
シミュレーショントレーニング、インストラクショナルデザイン

【はじめに】A病院消化器外科病棟は急変経験が少なく、看護師の多くに急変に対する脅威と苦手意識、学習ニーズがあった。

【目的】インストラクショナルデザイン(以下ID)を活用した急変時対応教育プログラム(以下プログラム)による実践シミュレーショントレーニング(以下シミュレーション)の効果と課題を明らかにする。

【方法】講義編は①急変・家族対応②気管挿管③救急カート薬剤のDVD視聴。実践編はシミュレーションと実践テストで構成した。DVDを視聴後テスト90点以上、実践テストは85点以上を合格とした。講義には急変時対応の課題である家族看護を盛り込み、実践テストで評価した。プログラム前後に急変知識のテストを実施しWilcoxon符号付順位検定による統計解析をした。取り組みの効果は、デブリーフィングの意見とアンケートの自由回答結果を後ろ向き分析した。

【倫理的配慮】研究者の所属する倫理委員会の承認を得た上で実施した。

【結果】看護師35名でDVD視聴後テスト合格率は100％。実践テストの合格率は1回目実施後26％、2回目実施後は100％となった。家族対応の項目は1回で全員が基準を達成した。急変知識のテストは、プログラム前後で有意差を認めた($P<0.01$)。アンケートの自由回答では、プログラム実践前は「急変の脅威・苦手意識・不安」「急変学習ニーズ」があり、実践後は「シミュレーションによる理解の促進」「さらなる学習課題の明確化」「実践後の不安」が記載されていた。デブリーフィングでは「新たな知識獲得による達成感や満足感」を感じていた。

【考察】全ての年代で急変知識に有意差を認めていることからIDによるプログラムは効果があったと言える。背景にはDVD視聴後テストによる要点の習得、シミュレーションによる知識のイメージ化、デブリーフィングによる学びと内省的思考が成功体験や学習効果に繋がったと考えられる。さらに、実践テストの時間を1時間と短時間にしたことで複数回実施が可能になり、全スタッフの実施率100％と効率性も向上させる事が出来たと考える。また、実践テストで家族看護の項目の基準を達成したことから、家族への初期対応の視点が定着化したと言える。

【結論】
1.プログラム前後の急変知識テストで有意差を認めた。
2.プログラムの実践は知識のイメージ化と内省的思考が機能し成功体験や課題の明確化につながった。
3.家族看護を重視したプログラムへの発展が課題である。